

No.2821

国際シンポジウム「南シナ海問題と世界秩序の未来」の概要

同志社大学法学部 准教授

鈴木 絢女

2018年1月27日、同志社大学今出川キャンパスにて、国際シンポジウム「南シナ海問題と世界秩序の未来」を実施した。

本シンポジウムは、米国が維持してきたオープンで普遍的なルールを基盤とした秩序と、北京を中心とする新しい世界秩序との断層として南シナ海をめぐる紛争を分析した。

ジョン・アイケンベリー教授（プリンストン大学）を講演者、村田晃嗣教授（同志社大学）を討論者とする基調講演では、グローバリゼーションの帰結としての先進国の国内政治の変化、米中パワーシフトという国際構造の変化のなかで、米国主導の自由主義的秩序が自らを修正する復元力を持ちえるのかという観点から議論が行われた。第一部「現代南シナ海問題の分析」では、坂元茂樹教授（同志社大学、国際法）、レナート・クルツ・デ・カストロ教授（デラサール大学、国際政治学）、石戸光教授（千葉大学、国際経済学）、佐藤考一教授（桜美林大学、国際政治学）が、それぞれ国際法からみた中国の行動、大国間政治と地域主義、南シナ海における経済分野における協調の可能性、海洋事故の予防へ向けた多国間協力枠組みについて報告した。以上をうけた第二部総合討論「世界秩序の相克？」では、阿川尚之同志社大学教授をモデレーターとし、白石隆教授（立命館大学教授・アジア経済研究所所長）、アイケンベリー教授、浅野亮教授（同志社大学）が、国際秩序が大幅な変容を迫られているのか、中国がどのような世界秩序観を持っているのか、また、中国は本当に既存秩序に対する挑戦者なのか、さらに、自由主義的秩序の維持のために日本をはじめとする先進国がインド太平洋地域においてどのような役割を果たすべきかを議論した。

シンポジウムの様子は、2月8日読売新聞朝刊で特集記事として報道された。会場には200名を超える聴衆が参加し、活発な質疑応答が行われた。シンポジウム議事録は、一般向け出版物としての刊行を予定している。